

## 学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 富 家 直 明



副査 中 野 倫 仁



副査 本 谷 亮



このたび 河村 麻果 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い、下記の結果を得たので報告する。

### 記

1 学 位 論 文 題 目 認知行動療法を実施するセラピストを対象としたアライアンスの質の向上・改善のための訓練方法の開発

2 論 文 要 旨 別添

### 3 学位論文審査の要旨

精神疾患に対する認知行動療法（以下、CBT）の有効性においては、数多くのエビデンスが蓄積されている。また、本邦の施策的取り組みとしても、厚生労働省がうつ病や不安障害の CBT マニュアルを整備するなど、CBT は精神保健を支える中軸的な心理療法として普及してきている。一方で、CBT をマニュアルに基づいて実施した場合でもドロップアウトや治療効果の不十分さが指摘されており、効果的な CBT の提供においては、治療関係、とくにアライアンス（治療同盟）が重要であるといわれている。

そこで、河村氏は、CBT を実施するセラピストのアライアンスの質の向上・改善を目的として、以下に示す3つの実証的研究を行い、その結果を含めた全6章からなる博士学位請求論文を執筆した。

第1章と第2章では、先行研究を概観し、アライアンスの定義や必要性、およびアライアンスの質の向上・改善に関する研究を進める上での問題点を明らかにした。その結果、(1) アライアンスの質の向上・改善を促す訓練プログラムに必要な訓練要素が不明瞭であること、(2) 本邦では、アライアンスの質を測定するための信頼性と妥当性の確認された測定尺度が未整備であること、が問題点としてあがり、(1)(2)を解決した上で、主目的であるアライアンスの質の向上・改善を促すための訓練プログラムの開発、効果検証を行うという論文骨子を作成した。

第3章では、(1)の問題点を明らかにするために、アライアンスの質の向上・改善を促す訓練方法についての先行研究を系統的に収集し、その共通要素を抽出することで、有用な訓練方法を明らかにする試みを行った（研究1）。その結果、アライアンスの質の向上・改善を促すための訓練内容として、「セッション中のセラピスト・クライアントの相互作用（やりとり）の理解・気づきを促す」と「治療関係スキルについての知識提供や使用を促す」が共通していることが明らかとなった。また、共通して用いられている訓練形式は、「ビデオ録画・録音を用いる」、「SV がセラピストのカウンセリングについて議論・フィードバックを与える」、「講義形式」、「ロールプレイを用いる」であることがわかった。

第4章では、(2)の問題点を解決するために、アライアンスの質の測定尺度である WAI-SR (Working Alliance Inventory- revised short version) の日本語版 J-WAI-SR を作成し、その信頼性と妥当性を検証した(研究2)。その結果、J-WAI-SR は、原版と一致する3因子(タスク、絆、ゴール)構造であり、信頼性と妥当性が確認された。

第5章では、第3章で明らかとなった訓練要素から構成されるアライアンスの質の向上・改善のための訓練プログラムを作成し、第4章で作成した J-WAI-SR を用いて、パイロットスタディの位置づけで訓練プログラムの効果検証を行った(研究3)。作成した訓練プログラムは、1回120分の全5回で、1~2週間に1度の頻度で実施された。第1回・第2回は、「セッション中のセラピスト・クライアントの相互作用(やりとり)の理解・気づきを促す」をテーマとし、セッション中のやりとりを三項随伴性の枠組みから捉える重要性について学ぶとともに、ロールプレイを通して、自分の「とらわれ」に気づき、対処するものであった。また、第3回・第4回では、「治療関係スキルについての知識提供や使用を促す」がテーマであり、共感を示す、あるいは協働作業を行うためのスキルに関して、ロールプレイ、ディスカッション、およびフィードバックを通じて取り組む内容であった。そして、第5回は、第1回~第4回の総括とそれまでに習得したスキルの実践をテーマとして、アライアンスを向上し、維持していくことに困難を感じる模擬クライアントに対するロールプレイを行い、振り返る内容であった。訓練プログラムの結果として、アライアンスの質に対しては効果がわずかであったが、カウンセリングを効果的に行う自己効力感とアライアンスの質を向上するためのスキルを用いる自信は向上し、クライアントに対して生じるネガティブな感情や思考に気づき、それに対処した上で意図的に関わる自信の向上も確認された。

第6章では、それぞれの研究成果を概観した上で、CBT セラピストを対象としたアライアンスの質の向上・改善のためには、「セッション中のセラピスト・クライアントの相互作用(やりとり)の理解・気づきを促す」と「治療関係スキルについての知識提供や使用を促す」の内容が訓練要素として重要であることを提唱した。また、アライアンスの質に対する訓練効果を高めるためのプログラム改善点を示唆した。具体的には、第3回と第4回を基礎編と応用編に分けて実施する、セラピー中のやりとりを記録し、振り返るプログラムを最終回まで継続実施する、全7回のプログラムとする、であった。そして、総合考察として、本研究での訓練プログラムを公認心理師養成過程においても導入する必要性、およびその臨床応用可能性について言及し、クライアントとの協働関係構築に関する知識提供やロールプレイは、学部や臨床実践の実習前の大学院生への実施が望ましいことを提言した。

予備審査において、審査委員より、訓練プログラムの共通要素の定義や位置づけ、短期プログラムでの効果予測、他の心理療法における同プロトコルの概観、訓練プログラムの多岐にわたる応用可能性と実践上の留意点などについて、指摘がなされたが、先行研究を交えて、適切な回答と論文修正がなされた。例えば、本研究では1対1を想定したセラピーでのアライアンスに関するプログラムであったが、CBT にはさまざまなパッケージや技法、形態(オンライン)あるいは対象を想定した実施(集団)が想定され、各場面における機能的なアライアンスの質の向上・改善が必要であるとの俯瞰的視点を取り入れた考察の改善がなされた。また、公開発表会においても、訓練プログラムにおけるセラピスト自身の内省の可否、力動的療法における治療関係との異同、J-WAI-SR 作成上にかかるベイジアン検証的因子分析の解釈妥当性、公認心理師の活動主要5領域での訓練プログラムの応用可能性などに関して、質疑が及んだが、いずれに対しても理論的整合性を有した回答がなされており、科学的、専門的知見に基づく十分な説明であった。

河村氏の着目したアライアンス、およびセラピストの教育体制に関するテーマは、国家資格である公認心理師の養成プログラムの構築が急がれる中、臨床心理学領域において、近年、大変注目されている。河村氏の本研究は、質を担保し、現実的な公認心理師養成課程における訓練プログラムとして大きく発展する可能性が伺え、本邦において、その活用と普及が強く期待される内容であるといえよう。

なお、本研究の一部は、以下のようにすでに査読付き雑誌に掲載されている。

(1) 河村麻果・入江智也・竹林由武・関口真有・岩野 卓・本谷 亮・坂野雄二(2020). A revised short version of Working Alliance Inventory 日本語版(J-WAI-SR)の作成 認知・行動療法研究, 46, 191-202.

以上のことを総合して考えると、河村氏の論文は従来の CBT の有用性をさらに高め、ユーザーに質の高いセラピーを幅広く提供することを可能にしようとする訓練プログラムの作成と効果検証、および適切な測定尺度の整備をまとめあげた秀作であり、その研究手法、論旨展開を鑑み、学術水準は十分に高度であることは自明である。

#### 4 最終試験の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する口頭発表及び質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査し、さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

以上の結果 河村 麻果 は

博士（臨床心理学）の学位を授与する資格の ある もの  
と判定する。  
ない